奄美大島の集落の生活

奄美大島の集落の多くは入り江にあり、島民は昔から森と海の恵みに頼って暮らしてきました。自然への深い畏敬の念は今も変わらず、環境と調和しながら暮らすことが大切にされています。たいていの集落は、神々が山から海に向かって通る経路であると言われる「カミミチ」(神の道)を守っています。

自然を敬う気持ちは、日本の伝統的なアニミズムと深く結びついています。集落の人々は、自分たちを取り巻く自然界の全てに神が宿っており、自分たちの暮らしは自然の恵みによるものであると考えています。琉球諸島全域に今でも色濃く残っている自然界への深い感謝と敬意はこのような考えから生まれています。集落の人々にとって、木、植物、食物を採る時に自然に感謝し、森に入る時には神々に祈りを捧げるのは一般的なことです。

秋名・幾里集落

博物館から北東へ車で 35 分のところにあるこの小さな漁村は、稲作が盛んに行われ、渡り鳥が水田で休憩と食餌をする島内随一の地域です。集落の暮らしは今でも季節のリズムや月の周期と共にあり、旧暦に従って伝統行事が行われています。集落の人々は漁を行なってエビ、タコ、貝を収穫し、近隣の森でイノシスを狩ります。夏の終わりには少なくとも 400 年前から行われている平瀬マンカイという祭りが開催され、祝女（ノロ）が豊作を祈願します。この祭りは重要無形文化財に指定されています。

西仲間集落

博物館から南西へ車で 35 分のところにあるこの小さな集落は、奄美諸島の多くの集落がどのように自らの信仰、慣習、自然と調和した暮らしを守り続けようとしているかを示す素晴らしい例です。集落を通っている「カミミチ」(神の道)は、山の神々が海へ向かう道を示していると言われており、今でも崇敬の念を持って扱われています。ミズガニ漁の伝統は少なくとも 200 年前から続いています。毎年旧暦の 8 月 15 日に行われる豊年祭では、集落の人々は自然の恵みへの感謝を示し、魔よけの祈禱を捧げます。